

令和6年度デジタル技術を活用した発信力強化事業

【京都府教育委員会】



文部科学省

☒ 授業での活用 ☐ 家庭学習での活用 ☐ パフォーマンステストでの活用 ☐ 小学校 ☒ 中学校 ☐ 高等学校

実践のポイント

AI等のデジタル技術の活用と、遠隔交流学習の組み合わせによる言語活動の充実

実践前

生徒の英語による発話量が少なく、話すことに自信がない傾向があった。教師は一人一人に十分に対応できず、一斉指導に偏りがちであった。発話の機会を増やし、個別指導を強化することで、生徒の自信と意欲を高めたい。



実践後

生徒は英語を話すことへの抵抗が徐々に減少し、自分の課題を認識し、「もっと話せるになりたい」という意欲が高まった。教師は、生徒一人一人の進捗に応じた指導が可能となり、生徒の変容を引き出すことにつながった。

実践内容

- 実証校数：11校（中学校：2校、義務教育学校：1校、府立高等学校附属中学校4校、特別支援学校：4校）
 - 対象人数：302名（中学校：270名、義務教育学校：22名、特別支援学校 10名）
 - 対象学年：中学校：第2学年
 - アプリ等：Terra Talk（ジョイズ株式会社）
 - 研究内容：仮説 生徒の話す力の強化のために、AI英語アプリを活用し、基礎的・基本的な知識及び技能の習得と活用を往還させる「知識活用のステージ」と、身に付けた知識及び技能を適切に運用する「広がりステージ」との往還が有効
 - ① 知識活用のステージ：AI英語アプリ（以下、AI）を、日々の授業における導入や言語活動の前後、終末のまとめなどで活用し、単元末のパフォーマンステストや交流学習に向けて基礎的な知識及び技能を習得
 - ② 広がりステージ：身に付けた力を国内外の生徒とのオンライン交流学習（以下、交流学習）で発揮し、思考力や表現力の向上を促進
- * 検証方法：文部科学省のアンケートやGTEC、ジョイズ株式会社作成スピーキング模擬テスト等を活用

「AIの効果的な活用」と「教師の役割の変化」

◆ AIとの対話 人との対話で広がる表現力

生徒は、AIとの会話練習後のフィードバックを基に改善点を確認。その後、ペアとの対話で異なる表現に触れ、表現の幅を広げるとともに、コミュニケーション本来の意義を実感。言語活動後にはAIを使って会話をさらに発展させ、達成度を確認し、次の目標を設定。

教師は、AIを効果的に活用した授業設計と学習支援。AIからのフィードバックを基に、生徒が自ら学習目標を設定できるよう適切な声掛けによりサポート。



◆ 世界とつながる英語交流で英語を「学ぶ」から「使う」へ

生徒は1人1台端末のビデオ通話アプリを活用し、単元や学期ごとのテーマで国内外の生徒と英語で交流する。例えば、「正月の違い」や「おすすめの場所ツアープラン」などのテーマで情報を集め、意見交換しながらプレゼンテーションを作成・発表。異文化理解を深め、実践的な言語運用能力や表現力を養う。

教師は、2つのステージを往還できる単元指導計画を作成。適切な問いかけや活動を設定し、生徒が思考を深め、相手の立場や文化を尊重しながら、状況に応じた表現で伝える力を養うことができるようにする。



ここが落とし穴！「AIの活用」と「教師の役割」

◆ 即興的なやり取りの難しさと文字依存のリスク

会話に詰まった際、AIは相手の返答を待ち続けるため、対面でのような即興的なやり取りが生まれにくい。また、会話文が文字で表示されることで、音声聞くよりも表示された英文を読むことに頼ってしまう場合がある。

教師は、AIとの会話練習と人同士の会話練習それぞれの特徴を見極め、目的に合わせて適切に使い分ける指導が必要。その上で会話場面での思考や表現を促す個別指導や、AIの即時フィードバック機能を生かした学習状況の把握と、生徒が主体的に学びに向かう姿勢を育む働きかけを行うことが必要。

成果検証

◆ 生徒の英語力

自分のことを話す力が大きく向上。AIによる繰り返し練習と台湾とのオンライン交流学習が成長を促す要因となった。

注：当該AIに搭載したスピーキング模擬テストにより測定（級は英検で換算）。各級の数値は、各級の受験者の平均正答率。

	自分のことを伝える (正答数/回答数)	
	第1回	第3回
全体平均	82%	94%
4級レベル 平均	88%	94%
3級レベル 平均	78%	93%

◆ 生徒の関心・意欲

「AI等のデジタル技術を利用してみて、実際に外国の人と話してみたいと思いましたか」

	① 当てはまる	② どちらかといえば当てはまる	①+②
AI使用中	27%	33%	60%
AI使用後	24%	46%	70%

肯定的な回答をした生徒が、AI使用中と使用後で10ポイントの向上が見られた。すでに海外との交流を経験している生徒たちにとって、AIによる会話練習が意欲をさらに高めたと考えられる。

◆ 教師の指導

8割以上の教師が「どちらかといえば当てはまる」という回答であった。今後は、個別や集団の状況をより細かに把握し、さらに効果的な支援ができるよう指導改善を進めていく。また、AIに搭載される教材を分析し、生徒の進捗に合わせた課題設定をすることも大切にしていく。

「AIのフィードバックを踏まえて次のステップを示し、助言を行いましたか」

	① 当てはまる	② どちらかといえば当てはまる	①+②
	17%	66%	83%